

愛は人の徳を建てる

—愛による自由の制限—

【聖書箇所】 14 章 13～23 節

はじめに

●ローマ人への手紙 14 章は、教会においてキリスト者同志がどうあらねばならないかを教えているところです。教会はさまざまな人が集まっているところです。ですから、見解の違い、考え方（思考回路）の違いだけでなく、興味や関心の違い、また感性の違いといったものがあります。そうした違いから、キリスト者同志の中にさばき合いが起こったりすることが少なくありません。ローマ教会にも、信仰の弱い人、強い人がいて、それぞれの考え方や見解の相違、あるいは習慣上の違いから、お互いにさばき合っていた現実があったようです。同じ神の家族でありながら、同じ主の民でありながら、同じく主のために生きているにもかかわらず、互いに反目したり、さばきあったりしていることほど愚かなことはありません。教会が内輪もめしているなら、外部に対して良いあかしをすることはできません。しかし私たちの敵であるサタンは実に巧妙な策略によって、こうした現実をもたらし、教会の力を失わせているのです。今回は、そうした現実に対して、「信仰の弱い者と強い者」という問題を取り上げ、互いにさばき合うことなく、キリスト者が一致を保って生きることを学びました。今回の箇所は、さばき合うことをやめるだけでなく、妨げになるもの、つまり、つまずきになるものを置かないように堅く決心することを求めています。

1. 恐れを解放する全き愛

●まずは、聖書を読んでみましょう。

【新改訳改訂第3版】ローマ人への手紙 14 章 13 節

ですから、私たちは、もはや互いにさばき合うことのないようにしましょう。いや、それ以上に、兄弟にとって妨げになるもの、つまずきになるものを置かないように決心しなさい。

●「つまずきとなるものを置かない」という前に、13 節に記されている「私たちは、もはや互いにさばき合うことのないようにしましょう。」というみことばに注目したいと思います。この 13 節は 1～12 節の結論として記されています。イエシュアも山上の説教の中で「さばいてはいけません。」と教えています。なぜなら、「あなたがたがさばかれないためです。・・あなたがたがさばくとおりに、(その基準で)あなたがたもさばかれるから」だと言われました。さばくということは、人を批判し、非難し、あの人はこうだとレッテルを貼って決めつけてしまうことです。しかも、私たちが人をさばく基準は非常に厳しいものなのです。

●ダビデがその良い例です。自分の家来のウリヤの妻を奪い、自分のものとしたとき、預言者ナタンがダビデのところへ来て一つの話をしました。「ある富んだ人が自分の客をもてなすのに、自分の家畜を殺すの

が惜しくなり、隣に住む貧乏な人の持っていた、しかもたった一匹の小さな雌の子羊を盗んで、それを客にご馳走した」という話です。ダビデ王はその話を聞くと非常に怒り、「そういうことをする人間は生かしておくべきではない。盗んだ子羊も四倍にして返すべきだ。」と言いました。すると預言者ナタンはダビデに向かって、「それは、あなたです!!」。

●ダビデは王として、国をうまく治めていくためには不正や不義を許すわけにはいかないのです。それで彼は非常に怒って罰すべきだと断罪しました。しかし彼は自分がさばいたその基準で神からさばかれたのです。もっともダビデは主のあわれみによって死ぬことはありませんでしたが、ウリヤの妻との間に生まれた子どもはさばきのゆえに死んだのです。

●私たちのうちにあるさばきの精神、この精神からだれも逃れることはできません。さばかないで生きることは、息をしなくて生きようとする者だと思われる人もいることでしょうか。なぜ人はさばくのでしょうか。なぜ人は告発し合うのでしょうか。その心理的理由として考えられることは、私たちのだれもが多かれ少なかれ、自分がさばかれているのではないかという恐れを持っているからです。この恐れに耐えることができずに、さばき合いが生じるのです。ですから、自分はさばかれていると強く思っている人は、それだけ強く人をさばくようになるのです。その根底には恐れと不安があるからです。多くの問題は、人ではなく、実は私たち自身のうちにあるのです。

●自分がさばかれているという恐れと不安、それが人をさばく精神の根底にあるのです。そうした恐れから私たちを解放してくれる救いの道はあるのでしょうか。然りです。聖書の中にその解決があります。その聖書が教える唯一の答えは、神の愛です。

「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。」(Iヨハネ 4:18)

●神こそ、私たちをあるがままで受け入れてくださった、ただ一人の方です。真の愛に触れることがさばきの精神から解放される道なのです。こんな私でも愛し受け入れてくださる方がいるということを知る時、神の全き愛は、私どもの恐れを締め出すと聖書は約束しています。私たちの自分の力によってはこの恐れに打ち勝つことは絶対に出来ません。この私たちの弱さをすべて承知の上で、さばくことなく、受け入れてくださる神の愛に触れ、聖霊の助けをいただくとき、はじめてさばかれているという恐れから解放されるのです。それゆえ、「もはや互いにさばき合うことのないようにしましょう」と言えるのです。そして、13節後半の「いや、それ以上に、兄弟にとって妨げになるもの、つまりきになるものを置かないように決心しなさい。」と勧められているのです。

2. 自由は愛によって制約を受ける

●ローマの教会の中には、実際、食べ物の中で兄弟につまずきを与えていることがあったようです。ある者は「野菜だけを食べ」(2節)、「肉を食べず、酒を飲まない」(21節)、また特定の日を重んじる人がい

ました。これらはユダヤ教の律法主義的な考えに強く影響された者たちであって、パウロはその人たちのことを「信仰の弱い人」と呼んだことは前回学びました。私たち日本人がキリスト者になった場合、救われているけれども、その育った環境によって、日本のさまざまな因習や慣習、人間関係といったことにこだわり、縛られているキリスト者がいます。信仰の本質に直接かかわらないことに対して、こだわりを持つ人、そのような人が「信仰の弱い人」なのです。逆に「信仰の強い人」とは、信仰の本質とは直接関係ない事柄に対してはこだわらず、自由に生きている人です。ただし、その自由は愛によって制限されるべきであるということ、パウロはここで取り上げようとしているのです。

●私が母教会で献身して、神学校で訓練を受けていた頃、教会の役員会とか、年輩の信徒から、よくこう言われました。「あなたの言うことはよく分かる。正しい。しかし・・・」と。私は「なぜ、なぜ正しいのなら、どうして」と思いました。しかし正論が必ずしも正しいとは限らないということを少しずつですが、いろいろなことを通して教えられました。Iコリント8章にも今回の箇所と同じ問題を扱っている箇所があります。

【新改訳改訂第3版】Iコリント書8章1～2節

1 次に、偶像にささげた肉についてですが、私たちはみな知識を持っているということなら、わかっています。

しかし、知識は人を高ぶらせ、愛は人の徳を建てます。

2 人がもし、何かを知っていると思ったら、その人はまだ知らなければならないほどのことも知ってはいないのです。

●ここでパウロが言おうとしていることは、あなたは知識としては偶像にささげられた肉は何ら人を汚すことはないということを知っている。したがって、その知識に基づけば、偶像にささげられた肉でも自由に食することができる。しかし、自分がそのような知識をもって自由に行動していると思っているなら、あなたはまだ大切なことを何も分かってはいないという意味なのです。これは異教の地で偶像にささげられた肉を食べることを、キリスト者としてどう考えればよいのかという質問状に対して、パウロが答えた箇所です。ある人にとっては、偶像というものは本来存在しない神であるから、そのような神にささげられた肉であったとしても、一向に食べて差し支えないという知識をもって自由に食べているキリスト者がいたようです。その人は「信仰の強い人」と言えます。しかしなかには、偶像にささげられた肉を単なる肉として考えることができないキリスト者もいたのです。あるいは、他の人が食べるので、自分も食べてしまったが、そのことで何か悪い事をしている気持ちがあるという人もいたのです。

●あるクリスチャンホームでの集会で、集会が終わってからお菓子ができました。私も甘党ですが、その家も甘党。「先生。とても美味しい煎餅があるんです。ぜひどうぞ」と言ってくれたので食べようとしてその煎餅を見ると、なんと「〇〇神社」という名前が書かれている。そのとき私は何と思ったでしょう。食べたでしょうか、それとも食べなかったでしょうか。

●答え・・・食べた(ただし、何か悪い事をしている感じで)。そのときの私としてはつまずきでした。「何と無神経な!」と思ったものです。煎餅それ自体は決して汚れているわけではありません。ただし、食べるこ

とで敗北感を感じたものです。パウロもローマ書 14 章 14 節で、「主イエスにあって、私が知り、また確信しているということは、それ自体で汚れているものは何一つないということです。」と述べています。それは知識です。食べる、食べないはその人の自由ということであったとしても、もし無遠慮にふるまうならば、弱い兄弟たちをつまずかせてしまうことになりかねません。とすれば、時として、自由は愛によって制限されるべきであるというのが、聖書が教えようとしていることだと思います。つまり、ものごとは正論だけでは通用しないことがあるということです。他の人を顧みるという愛の配慮が必要なのです。正論、知識、主義を押し通すことは、ある意味において男らしいのですが、愛は正論、知識、主義よりも大切なのだということなのです。いずれにしても、以下の通りです。

【新改訳改訂第3版】ローマ書 14 章 15 節

もし、食べ物のことで、あなたの兄弟が心を痛めているのなら、あなたはもはや愛によって行動しているのではありません。キリストが代わりに死んでくださったほどの人を、あなたの食べ物のことで、滅ぼさないでください。

●もし、ある人のつまずきとなるならば、たとえ正論であったとしてもそれを押し通さない、これがキリスト者相互の関係にとって非常に大切な知恵なのです。パウロはガラテヤ書で次のように記しています。

【新改訳改訂第3版】ガラテヤ書 5 章 1 節、13 節

1 キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。

13 兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。

●私たちが自分で自分自身を吟味する場合、神と人において認められているかどうかという面も吟味する判断材料なのです。16 節「・・・あなたが良いとしている事から(=知識に基づく自由)によって、そしられないようにしなさい。」。18 節「キリストに仕える人は、神に喜ばれ、また人々からも認められるのです。」神にだけ喜ばれば良いとするのではなく、人からも愛の人として認められる必要があるのです。でなければ、教会を建て上げていくことはできないからです。

●私たちの主からの使命は大きく分けて二つあります。その一つは「福音を宣べ伝えること」です。そしてもう一つの使命は「キリストのからだである教会を建て上げること」です。両者は車の両輪のようなもので、密接な関係にあります。からだが分裂しては、福音を宣教する力は喪失します。そこで 19 節、「そういうわけですから、私たちは平和に役立つこと、お互いの霊的成長に役立つことを追い求めましょう。」とあります。柳生訳はこの箇所を「・・・(そこに)私たちの全努力を集中しようではないか」と訳しています。ここには二つのことが挙げられています。

(1) 「平和に役立つこと」とは、人との平和な関係、 (2) 「霊的成長(徳を高める=神の家を建て上げる)」

●そのためには、愛の配慮をもって、極力、つまずきとなることをしないということです。正論、それ自体悪いことではなくても、ある行動や態度を愛によって制限することは、「良いことなのだ」と聖書(聖霊)は教えているということです。

1995.7.09